

# 四国遍路の形成について

寺内 浩

## 1、平安時代の四国遍路

『今昔物語集』巻31-14に「今昔、仏の道を行ける僧三人伴なひて、四国の辺地と云は伊予、讃岐、阿波、土佐の海辺の廻也。其の僧共口を廻けるに、思ひ懸けず山に踏入にけり。深き山に迷にければ、浜辺に出む事を願ひけり。」とあり、また『梁塵秘抄』にも「われらが修行せし様は 忍辱袈裟をば肩に掛け また笈を負ひ 衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地をぞ常に踏む」とあるように、平安時代の後期には四国の海岸部を巡り歩く修行、すなわち遍路修行が成立していた。こうした海岸部で修行を行う遍路修行は、日本古来の海洋信仰を基層とし、それに平安時代になって浄土信仰が重ね合わさって成立したものである。また遍路修行は、海岸部を単に歩くだけでなく、霊験所などで厳しい修行を行うものであった。

遍路修行自体は当時全国で行われていたが、とりわけそれが盛んだったのが四国である。それは、四国が浄土への渡海の地と考えられ、浄土に近い修行地として特別視されていたためと考えられる。当時の浄土思想では、西方に阿弥陀浄土、南方に観音浄土があると考えられていた。畿内とその周辺では、西に大阪湾を望む四天王寺、南に熊野灘を擁する熊野が浄土信仰のメッカとなっており、熱心な信者が多く参詣した。中には入水したり、補陀落渡海を行う者もいた。四国も同様であり、浄土往生を願う者が多くやってきた。西方の海上への入水や室戸や足摺からの補陀落渡海もなされていた。このように京からみて西南の方向にあり、四方を海に囲まれた四国は四天王寺と熊野の持つ意味を合わせ持っていたのである。四国で遍路修行が盛んであった理由は、こうした点にあると考えられる。

## 2、平安時代中後期の仏教信仰

律令制下の仏教は国家仏教であり、鎮護国家をその主たる目的としていた。僧尼は保護が与えられるかわりにきびしい統制が加えられ、社会の中で自由に仏教活動を行うことはできなかった。しかし、10世紀後期になるとこうした僧尼令体制が崩壊し、僧尼は自由な布教活動が可能となった。一方、寺院の側も国家の保護がなくなって経済的自立をせまられ、地方豪族や一般民衆からの経済的支援が不可欠のものとなった。こうしたことから、僧尼や寺院からの民衆への働きかけが盛んになり、平安時代後期になると世俗社会へ仏教が深く浸透していくのである。

当時の仏教信仰は、「現世安穩」、「後生善処」という二世安樂的信仰形態が基本であった。平安時代後期の仏教といえば浄土信仰が強調されるが、実際には人々は浄土への往生とともに現世での幸福も大いに期待していた。伊予国でも同様であったことは、平安時代を代表する相撲人として著名な越智経世の母が1013年に大和国の長谷寺に詣でる一方で、『日本往生極楽記』に越智益躬の往生伝がみえることから確認できる。長谷寺は当時現世利益を求める人々で賑わっており、越智経世の母もまた「現世安穩」を願ってわざわざ遠方の長谷寺まで出かけているのである。一方、『日本往生極楽記』は極楽往生をとげた人々の伝記であり、越智氏においては浄土信仰もまた盛んであったことがしられる。

当時は浄土へ往生するための修行方法は多様であると考えられていた。諸行往生、つまりさまざまな作善をなすことによって浄土への往生ができるとされていたのであり、念仏のみが往生の手段であるとされるようになったのは法然以降のことである。

「現世安穩」と「後生善処」を願うのは修行者も同じであった。彼らは験力を身に付けて現世での栄達を願うとともに諸行により浄土への往生を願っていた。『法華験記』中-42には、陽生がある行者から靈験所での修行を勧められ、「偏に修行を宗とし、法華経を読誦」した結果天台座主になることができたが、浄土往生を願う気持ちが強いためその後辞任した話が載せられている。また、諸行往生については、源為憲の『空也誅』に「少壯の日、優婆塞をもって、五畿七道を経て、名山靈窟に遊ぶ、(中略)阿波・土佐両州海中に湯島あり、地勢靈奇、天然幽邃、(中略)彼の島に詣で、六時恭敬、数月練行」、『日本往生極楽記』に越智益躬が「朝は法華を読み、昼は国務に従ひ、夜は弥陀を念じ」とあり、念仏だけでなく厳しい修行や法華経の読誦も浄土へ往生するための手段であったことがわかる。

### 3、遍路修行者と地域・民衆

平安時代後期には地域にさまざまな僧が在住していたが、疫病流行のため国人が国内在住の僧を招いて仁王講を行い(『今昔物語集』20-35)、比叡山から摂津国に帰国した僧が村内の法会などに招かれ(同19-21)、また丹後国の聖人が受領に勧めて迎講を行わせる(同15-23)など、彼らは現世利益、浄土への往生を求める地域の人々の要求に応じる活動を行っていた。

修行僧も同様であった。『今昔物語集』には、明石津で遍歴の法師が疫病退散のための供養を行う(14-44)、信濃国で盲目の流浪僧が村に招かれ法華経を読み病人をなおす(13-18)、筑前国極楽寺で能登国からきた僧が千日講を行う(15-24)などの話がみえる。このように各地を遍歴する修行僧も在地民衆の要求に応えていた。仏教が社会に深く浸透した結果、人々は仏教により現世利益を求め、浄土への往生を願うようになり、僧の活動に対する需要が以前より格段に高まったのである。もちろん修行僧はその見返りとして一定の報酬を得ていたようである。修行とはいえ日々の食料など最低限度の経費が修行者には必要だったが、それらの一部を修行者はこうした活動により確保していたのではないだろうか。

しかし、修行僧のすべてが歓迎されていたわけではない。『今昔物語集』26-21に、「一人の修行の僧来たりて、貴く経を読み食物を乞う。僧の形、いと清げなりければ、『無下の乞食にはあらぬなめり』、と思ひて、女主人経を貴むで、上に呼び上げて物を供養するに、僧の云はく、『己は乞食には侍らず、仏の道を修行して所々に 流浪するが、糧の絶えたれば、来たりてかく申すなり』」とある。つまり、女主人は修行僧が乞食僧でないことを確認して家に入れたわけであり、ここから乞食僧は人々によって排除されていたことが読みとれる。また、同15-15の「比叡山僧長増往生語」は、比叡山の高僧長増が突然出奔し、数十年後弟子の清尋が伊予守藤原知章に伴って伊予国に下向したところ、乞食僧として四国を巡っていた長増に再会する話だが、長増が清尋に会おうとしたところ乞食僧であるが故に追い返されたものの、長増が高僧であることがわかると人々が深く帰依したとある。ここからも当時の在地の人々はすぐれた僧は歓迎するが、乞食僧は排除していたことが知られる。

院政期には畿内・西日本の各地に聖が集団で生活する別所が数多く形成されていた。そうした別所では周辺の住民が結縁し、聖たちを経済的に支えていた。靈験所では多くの修行者が長期間滞在して修行を行っていたわけであるから、靈験所は別所の様相を呈していたと思われる。そして、別所と同様靈験所でも周辺の住民が結縁していたのではないだろうか。このことは『今昔物語集』17-6の土佐国室戸津の津寺の地藏靈験記に「其より後、其の津を通り過る船の人、心ある道俗男女、此の寺に詣でて、其の地藏菩薩、毘沙門天

に結縁し奉らずといふことなし」とあることからうかがうことができる。霊験所の修行者たちは地域の人々によって支えられていたのである。

また、平安時代後期になると寺院が霊験所であることを盛んに強調するようになる。たとえば、土佐国室戸の金剛頂寺は「件寺は弘法大師祈下明星初行の地なり、(中略)国宰より庶民に至るまで当寺仏法の霊験を仰がんがため、各山川田畑等を施入する所なり」(『平安遺文』1047)、土佐国足摺の金剛福寺は千手観音経供田について「観音慈悲之垂跡に奉遇す」(同3184)、讃岐国の曼荼羅寺は「件山中は大師点入したまふ霊験の地なり」(同1008)、「霊験掲焉の勝地なり、これにより、代々の国司殊に帰依を致す」(同3290)としている。これは国郡あるいは貴族・豪族の経済的保護を得るために自寺院が霊験所であることを主張する必要があったためであろう。ところで、遍路修行者は霊験地で修行を行っていたので、寺院にとって修行者が多く集まることは、そこが霊験地であることを証明するものであり、好ましいことであった。霊験所の寺院にとって修行者は保護すべき存在であった。このように遍路修行者は寺院の保護も受けていたと思われる。平安時代後期以降遍路修行が盛んになるのはこうした地域の人々の支援や霊験所寺院の保護があったことも一つの要因であったと考えられる。



公開シンポジウム (左から小嶋、中谷、加藤各氏)



公開シンポジウム パネルディスカッション